Pew Research Center

2024年6月17日公開

東アジア社会における宗教性と精神性

香港、日本、韓国、台湾、および隣接するベトナムで実施されたアンケート調査では、多くの人が自分は宗教的ではないと思っているが、目に見えない存在を信じ、先祖の霊を崇拝し、儀式を行っていると答えていることが判明した

BY *Jonathan Evans, Alan Cooperman, Kelsey Jo Starr, Manolo Corichi, William Miner and Kirsten Lesage*

メディアまたはその他のお問い合わせ:

Jonathan Evans、シニア・リサーチャー
Achsah Callahan、コミュニケーション・マネージャー

202.419.4372

www.pewresearch.org

推奨される引用

Pew Research Center、2024年6月、「東アジア社会における宗教と精神性」

Pew Research Centerの概要

Pew Research Center、世界を形作っている問題、態度、傾向について一般の人々に情報を提供する、超党派、非擁護のファクトタンクであり、政策的立場をとっていない。当研究所では、世論調査、人口統計調査、計算社会科学研究、その他のデータ駆動型研究を実施している。また、政治・政策、ニュース習慣・メディア、インターネット・テクノロジー、宗教、人種・民族、国際情勢、社会的・人口動態的・経済的傾向、科学、研究方法論・データサイエンス、移民・移住に関する研究を行っている。ピュー研究所は、主要な資金提供者であるThe Pew Charitable Trustsの子会社である。

© Pew Research Center 2024

実施方法

本報告書では、東アジアと隣接するベトナムの成人10,390人を対象にアンケート調査が行われた。現地のインタビュー担当者によって、2023年6月から9月にかけて7か国語でアンケート調査が実施された。インタビューは4つの社会、香港、日本、韓国、台湾を対象に電話で実施された。ベトナムではインタビューは対面で行われた。

The Pew Charitable TrustsとJohn Templeton Foundationの資金提供による本アンケート調査は、Pew-Templeton Global Religious Futures projectの一環であり、宗教の変化とそれが世界中の社会に及ぼす影響を研究するPew Research Centerによる広範な取り組みである。

同センターはこれまで、サブサハラ・アフリカ地域、中東・北アフリカ地域およびイスラム教徒の人口が多い地域、ラテンアメリカ；イスラエル、中央および東ヨーロッパ、西ヨーロッパ、インド、南アジアおよび東南アジア、米国で宗教に焦点を当てたアンケート調査を実施してきた。

アンケート調査を設計する際、質問が文化的に適切なものとなり、回答者がその意図した意味を理解できるようにするために、アジアの宗教に関する学術専門家からなる諮問委員会への相談や、日本と台湾で認知インタビューを実施するなど、いくつかの手順が講じられた。（認知インタビューでは、回答者は質問を声に出して読み、それに答え、自分の考えについて話し合うよう求められる。）また、完全なアンケート調査が、フィールドワークの前に5つの地域すべてで事前テストされた。

アンケートは英語で作成され、広東語、法華語、日本語、韓国語、北京語、ベトナム語の6つの地域の言語に翻訳された。ネイティブレベルの能力を備えた言語学者によって翻訳チェックが行われた。「神」への信仰に関する質問では、翻訳者は各言語で神を表す最も一般的な単語を選択し、特定の宗教の神や女神のみを指す用語を避けるよう指示された。

回答者は、確率に基づいたサンプル設計を使用して選択された。データは、さまざまな選択確率を考慮し、成人人口の人口統計学的ベンチマークと一致するように重み付けされている。これにより、調査が年齢、性別、教育の観点からより広範な国民を代表するものとなることが保証されている。

詳細については、報告書の「方法論」セクション（英語）および完全なアンケート調査（英語）を参照のこと。

謝辞

本報告書は、宗教の変化とそれが世界中の社会に与える影響を分析するPew-Templeton Global Religious Futures project, Pew Research Centerによって作成された。国際宗教未来プロジェクトへの資金は、The Pew Charitable TrustsとJohn Templeton Foundationからの提供によるものである (助成金 62287)。

関連報告書については、オンラインにてpewresearch.org/religionをご覧ください。

本報告書、以下の個人の意見と分析に基づいた共同作業です。

リサーチチーム

Jonathan Evans、*シニア・リサーチャー*
Alan Cooperman、*宗教研究ディレクター*
Kelsey Jo Starr、*リサーチ・アナリスト*
Manolo Corichi、*リサーチ・アナリスト*
William Miner、*リサーチ・アシスタント*
Kirsten Lesage、*リサーチ・アソシエイト*

メソッドチーム

Patrick Moynihan、*国際リサーチメソッド担当アソシエート・ディレクター*
Carolyn Lau、*国際調査方法論学者*
Sofi Sinozich、*国際調査方法論学者*

エディトリアルおよびグラフィックデザイン

Dalia Fahmy、*シニアライター/エディター*
Rebecca Leppert, *コピーエディター*
Bill Webster、*シニア・インフォメーション・グラフィックス・デザイナー*

コミュニケーション・Webパブリッシング

Achsah Callahan、*コミュニケーション・マネージャー*
Gar Meng Leong、*コミュニケーション・マネージャー*
Mithila Samak、*コミュニケーション・アソシエイト*
Justine Coleman、*アソシエイト・デジタル・プロデューサー*
Anna Schiller、*コミュニケーション部門アソシエート・ディレクター*
Stacy Rosenberg、*デジタル戦略ディレクター*

本報告書に貢献した同研究所の他のメンバーには、ネーハ・サーガル、コンラッド・ハケット、ユンピン・トン、アン・フェンヤン・シー、クリスティーン・ファン、グレゴリー・A・スミス、ローラ・シルバー、ベッカ・A・アルパー、ジェフ・ディアマント、ドリュー・デシルバー、グレイシー・マルティネス、ローラ・ルイスが含まれる。

本報告書に貢献した元同研究所スタッフには、アリアナ・モニーク・サラザール、アダム・ウォルスキー、クラーク・レターマン、スコット・ガードナー、アレクサンドラ・カスティージョ、オムカー・ジョシ、マーク・ワン、ラバーン・アチアンポンが含まれる。

同研究所より、本報告書のすべての段階で指導を提供してくださった以下の専門アドバイザーの委員会に感謝いたします。Wei-Hsian Chi（中央研究院社会学研究所准研究員）、ヘレン・ハーデカー（ハーバード大学ライシャワー日本研究所日本宗教社会学教授）、トゥアン・ホアン、ブランシュ・E・シーバー（ペパーダイン大学人文科学および教師教育教授）、ジボム・キム（成均館大学社会学教授兼調査研究センター所長）、マーク・R・マリンズ（オークランド大学日本研究教授）、アンナ・サン（デューク大学宗教学および社会学准教授）、フェンガン・ヤン（パデュー大学 宗教・グローバル・イーストセンター所長）。

アンケート調査のための現地調査は、ランジャー・リサーチ・アソシエーツ（Langer Research Associates）ならびにD3 Systemsの指導の下で実施された。

本報告書の分析はアドバイザーとの協議に基づいて行われたが、データの解釈と報告にPew Research Centerが単独で責任を負う。

東アジア社会における宗教性と精神性

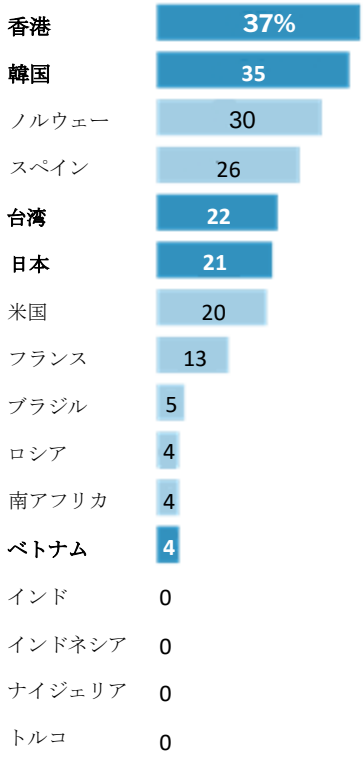
香港、日本、韓国、台湾、および隣接するベトナムで実施されたアンケート調査では、多くの人が自分は宗教的ではないと思っているが、目に見えない存在を信じ、先祖の霊を崇拝し、儀式を行っていると答えていることが判明した

見方によっては、東アジアは世界で最も宗教性の低い地域の一つのように思われる。 毎日祈ったり、宗教が生活の中で非常に重要であると答えた東アジアの成人は比較的少数である。また、Pew Research Centerが東アジアおよび隣接するベトナムの成人1万人以上を対象に実施した新たなアンケート調査によると、離反率（宗教から離れる人々）は世界で最も高い部類に入る。

しかしながら、本アンケート調査結果によると、その地域の多くの人々が依然として宗教的または精神的な信念を持ち、伝統的な儀式に参加しているということも判明した。

特定の地域と比較した東アジアとベトナムにおける宗教離れ

幼少期の宗教から離れ、もはやどの宗教にも属さないと答えた各地域の成人の割合（%）



注：Pew Research Centerが 2008年以降にアンケート調査を実施した102の地域から選ばれた。過去のアンケート調査で得られたものは、一般に地域のパターンを代表している。102の地域すべてのデータと分析については、本報告書の後半にある「世界の他の地域と比較した東アジアにおける宗教の転向」をお読みください。

出典：アンケート調査は2008年から2023年まで実施された。「東アジア社会における宗教性と精神性」

PEW RESEARCH CENTER

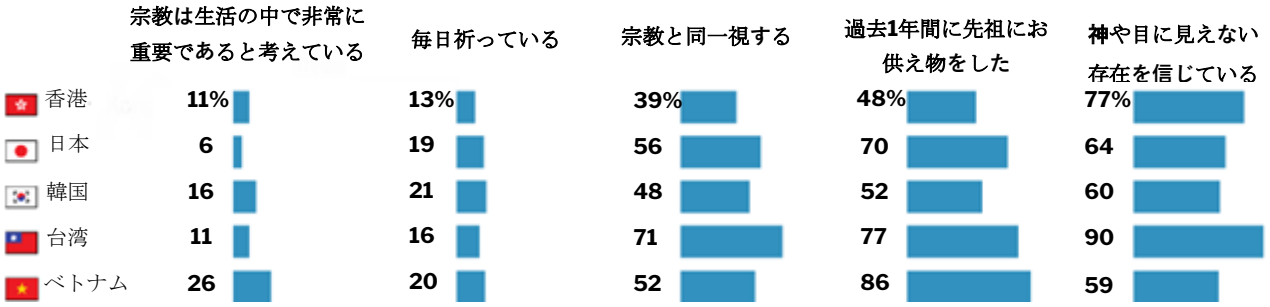
- 香港、日本、韓国、台湾、ベトナムでアンケート調査に参加した成人の大多数は、**神や目に見えない存在を信じ**ていると答えている。
- 宗教的な裏付けを持つ**先祖崇拝の儀式**に参加している人も少なくない。例えば日本では、70%の人が過去12か月以内に先祖にお供え物をしたりして供養したと報告している。ベトナムでは、86%が昨年この儀式を行っている。
- 宗教上の人物や**神に対して祈ったり、敬意**を表したりすることはかなり一般的である。たとえば、香港では成人の30%が慈悲の神である*観音*に祈ったり敬意を表したりしていると回答し、台湾では46%が仏陀に祈ったり敬意を表したりしていると回答している。

台湾の27%から香港の61%に至るまで、この地域全体の多数の成人が「無宗教」と回答している。しかしながら、宗教に無所属の人々の間でも、半数以上が亡くなった先祖のためにお供物をしており、少なくとも10人中4人が神や目に見えない存在を信じている。また、4分の1以上の人が、山、川、木には精霊がいると答えている。

つまり、これらの社会の宗教を、人々が宗教に属していると回答したかどうかではなく、何を信じ、何を行うかによって測ると、この地域は当初考えられていたよりも宗教的に活気が溢れているということである。

東アジア人で宗教が生活の中で非常に重要だと考えている人はほとんどいないが、多くの人は先祖に供物をし、神や目に見えない存在を信じている。

次のように回答した各地域の成人の割合（%）



注：回答者は、過去12か月間、先祖にお供え物をしたりして供養したかどうか尋ねられた。回答者は、神を信じているか、あるいは世界には神や精霊などの目に見えない存在が存在すると思うか、と別々に尋ねられた。「神」は、特定の宗教の神や女神を指すことなく、可能な限り一般的な用語を使用して各言語に翻訳された。

出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。「東アジア社会における宗教性と精神性」

PEW RESEARCH CENTER

東アジアの宗教に関するデータを収集することは複雑な課題である。宗教の概念が学者によってこの地域に持ち込まれたのは、わずか1世紀ほど前のことであり、「宗教」の一般的な訳語 (中国語の宗教*zongjiao*、日本語の*宗教*、韓国語の宗教*jonggyo*など)は、多くの場合、組織化された階層的な形態を指すと理解されており、キリスト教や新しい宗教運動などの宗教は、アジアの伝統的な精神性の形態ではない。

アンケート調査には、人々の生活の中で宗教がどれほど重要であるかなど、世界の他の地域で宗教遵守を測定するために長年使用されてきたいくつかの質問が含まれていた。ただし、本報告書は、祖先崇拝、自然界における精霊の存在在、 神や宗教上の人物に対する敬意、死後の世界についての信念、アイデンティティとは別に、 宗教との個人的なつながりを含む、アジア社会で比較的一般的な信念と実践を測定するために設計された新しい質問に重点を置いている。

本報告書は、東アジアの4つの社会 (香港、日本、韓国、台湾) ならびに隣接するベトナムの成人10,390人を対象とした大規模な地域調査に基づいている。アンケート調査は、2023年6月2日から9月17日まで7か国語で実施され、Pew Research Centerが以前に発表した中国、インド、南アジアおよび東南アジアの宗教に関する研究に基づいている。

本概要のその他のハイライト：地域における宗教転向 | 東アジアにおける宗教転向と世界の他の地域との比較 | 一般的な信念と実践 | 東アジアの元仏教徒と生涯仏教徒を比較する方法 | 本報告書のその他の重要な調査結果

完全な報告書は英語で入手できます。

第1章：宗教の風景と変化

第2章：生き方としての宗教

第3章：信念

第4章：実践

第5章：先祖崇拝、葬儀、死後の世界への信仰

第6章：宗教、政治、社会

東アジアをどう定義するか

通常、東アジアには中国、香港、日本、マカオ、モンゴル、北朝鮮、韓国、台湾が含まれると考えられている。地政学的観点では、ベトナムは東南アジアの一部として分類されることが頻繁にある。ただし、中国との歴史的なつながりや儒教の慣習など、いくつかの理由から東アジアとともにベトナムでもアンケート調査を実施した。さらに、ベトナムの仏教徒は、東アジア全域に見られるのと同じ系統の仏教 (大乗) を実践している。

本報告書全体を通じて、「東アジア」という用語は香港、日本、韓国、台湾を指す。

より広範な「地域」全体の傾向について議論する場合、ベトナムも含まれる。

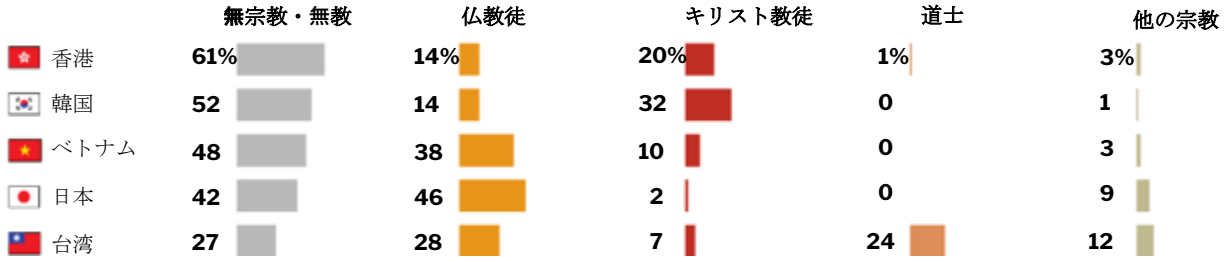
法的および物流上の理由から、一般に東アジアの一部と考えられている他のいくつかの地域についてはアンケート調査は実施しなかった。現在、中国では中国以外の組織が本土で調査を行うことが認められておらず、北朝鮮では世論調査も実施できない。モンゴルでは、国民の大部分が遊牧生活

地域における宗教転向

調査対象となった人のほとんどは、宗教に属していないか、仏教徒であると自認している。さらに、韓国と香港では成人のかなりの割合がキリスト教徒であると自己認識しており、台湾にはかなりの数の　　道教信者（道士とも綴られる）がいる。[1]

香港、韓国、ベトナムで最も一般的な宗教は「無宗教」である。

現在以下のように自己認識している各地域の成人の割合（%）。



注：「その他の宗教」には、「イスラム教」、「儒教」、「地域宗教・土着宗教」、「複合宗教」、日本では「神道」を選択した人も含まれる。「わからない・回答を控える」の回答は表示されない。
出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。
「東アジア社会における宗教性と精神性」
PEW RESEARCH CENTER

---

[1]ベトナムの2019年人口・住宅国勢調査によると、総人口の86%が無宗教であり、本調査では無宗教であると自己認識しているベトナム人成人の48%よりもはるかに高い割合となっている。ベトナムの国勢調査によると、仏教徒の割合（全人口の5%）は、本調査結果の割合（成人の38%）よりもはるかに小さいことが示されている。しかしながら、米国国務省によると、ベトナムの国勢調査では、ベトナム仏教サンガに正式に登録している人のみが仏教徒としてカウントされるという。

ただし、この地域における宗教的アイデンティティは驚くべき変化を遂げつつある。多くの人は、自分たちは今主張しているものとは異なる宗教的アイデンティティを持って育ったと回答している。

宗教的な教育から離れて別の宗教に、あるいは無宗教に転向した人の割合は、ベトナムの成人の17%から香港と韓国の成人の53%に及んでいる。

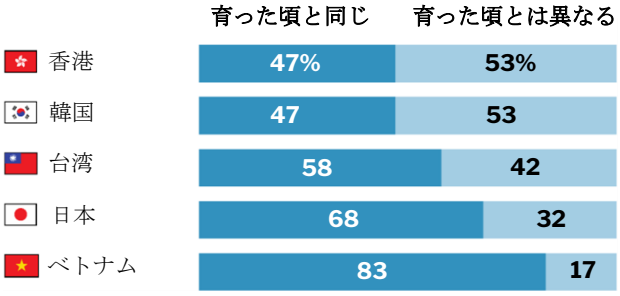
(運動があらゆる方向に進み、必ずしも正式な儀式や儀礼が伴うわけではないことを示すために、「改宗ではなく「（信仰の）転向」という用語を使用している。)

宗教転向の割合は、慣習内での転向ではなく、世界の主要な宗教慣習間の移行に基づいている。たとえば、キリスト教と仏教の間の転向はこれらの尺度で検出されるが、カトリックとプロテスタントの間の転向、またはイスラム教の異なる宗派の間の転向は検出されない。

また、特定の宗教から無宗教に移行した人、またはその逆に転向した人もカウントされる。

香港と韓国の成人の53%が子供の頃から宗教的アイデンティティを変えている

各地域の成人の%が、今日以下の宗教的アイデンティティを持っている。



注：この分析では、次のカテゴリ間の宗教転向を測定する。キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、仏教徒、ヒンズー教徒、「その他の宗教」、「無宗教」、および無回答者。
出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。
「東アジア社会における宗教性と精神性」

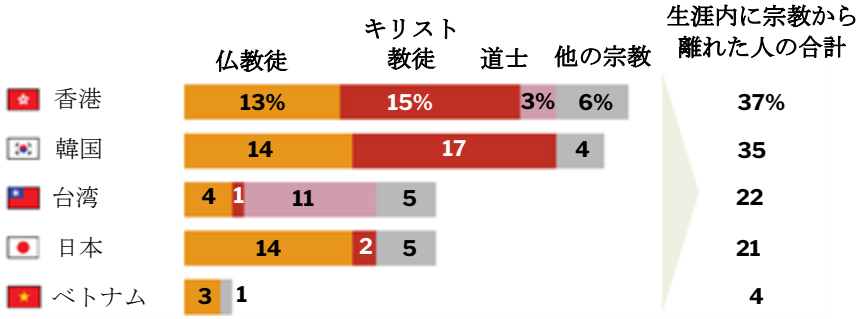
PEW RESEARCH CENTER

宗教転向の大部分は宗教離れである。東アジア人の多くは、幼少期にある宗教の中で育ったものの、今は何の宗教にも属さないと回答している。（隣接するベトナムではこれはあまり一般的ではない。）

宗教離れのほとんどが、仏教、キリスト教、道教からである。たとえば、香港の成人の15%は、キリスト教徒として育てられたが、現在は無宗教であると回答している。また、韓国と日本の成人の14%は、仏教徒として育てられたが、もはやどの宗教にも属さないと回答している。

東アジアでは、もはや宗教を自己認識していない人の多くが仏教徒として育てられた

自分は以下の宗教として育てられたが、現在は無宗教だと回答した各地域の成人の割合（%）。



注：この表の「他の宗教」には、イスラム教徒として育てられたと回答した人、儒家、地元の宗教または先住民の宗教や宗教の組み合わせまたは他の宗教、子供の頃の宗教を答えなかった人、そして日本では、自分は「神道」で育てられたと回答した人が含まれる。数値は四捨五入の関係で表示の小計に加算されない場合がある。
出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。
「東アジア社会における宗教性と精神性」
PEW RESEARCH CENTER

しかしながら、宗教の転向率が高いのは、人々が宗教を放棄することだけが原因ではない。韓国(12%) と香港 (9%) では現在、成人のおよそ10人に1人がキリスト教徒であると自認しているが、仏教など異なる宗教的慣習の中で育ったか、宗教的アイデンティティを持たずに育ってきた。

同様に、台湾では成人の11%、ベトナムでは10%が仏教以外で育ったものの、現在は仏教徒であると自己認識している。

それでも、総合的に見ると、宗教に属していない人々は、調査対象地域のうち4つの地域で転向したことで純増を得ており、分析では他のすべての宗教団体から脱会している。

たとえば香港では、成人の30%が無宗教で育ったと答えているが、現在61%が宗教に無所属であると自己認識しており、これは31ポイントの増加である。

ベトナムは、宗教転向により無宗教の人々が純損失を経験した唯一の調査対象地域である。ベトナムの成人の55%は無宗教で育ったと言っているが、48%は現在無宗教であると自己認識している。

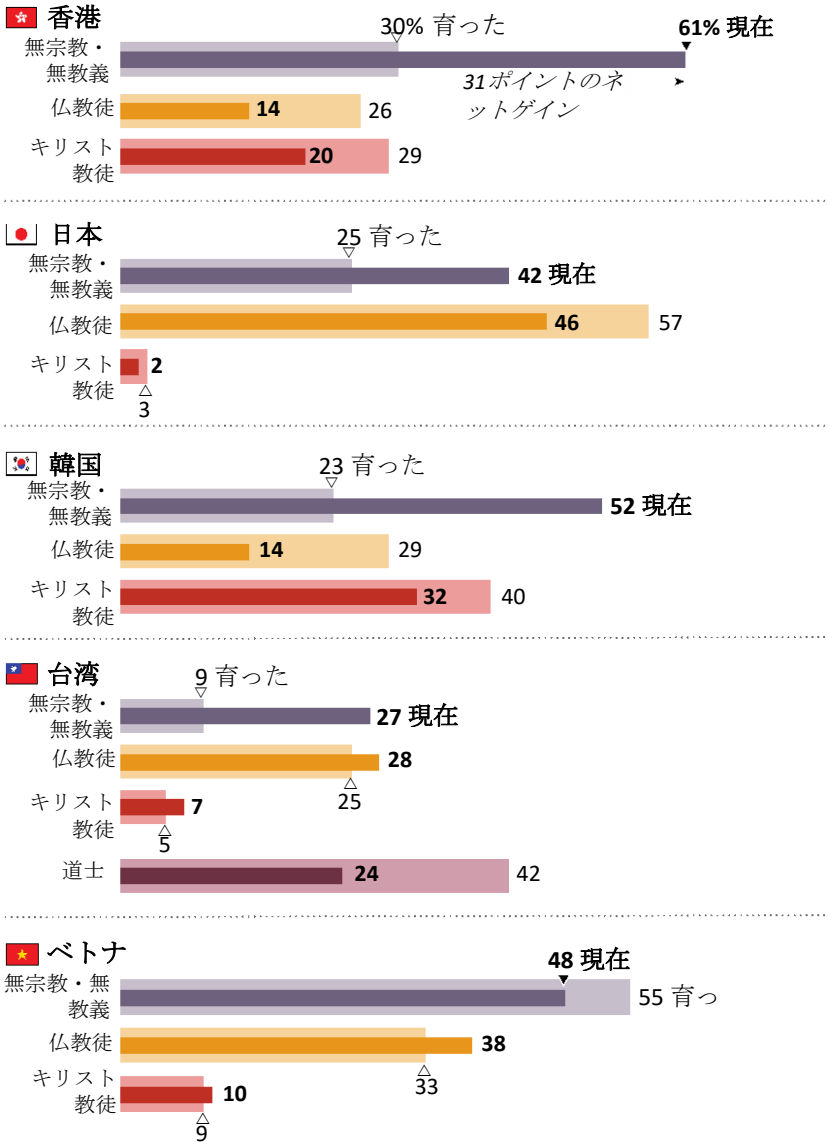
一方、香港、日本、韓国では仏教徒が宗派転向による純減を経験している。たとえば、韓国の成人の29%は仏教徒として育てられたと答えているが、14%は現在仏教徒であると答えており、15ポイント減少している。

一方、台湾とベトナムでは宗教転向により仏教徒が若干増加している。

(宗教の転向について詳しくは、第1章をお読みください。)

香港、日本、韓国では仏教の「宗教転向」により信者が減少した

各地域の成人の%が、それぞれの所属宗教グループとして育ち、現在もそれぞれの所属宗教グループであると自己認識している



出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。
「東アジア社会における宗教性と精神性」
PEW RESEARCH CENTER

世界の他の地域と比較した東アジアにおける宗教転向

東アジアの宗教転向率（日本の32%から香港と韓国の 53%）は、Pew Research Centerが他の多くの地域で測定したものよりも高い。[2]たとえば、2019年以来、カンボジア、インド、インドネシア、マレーシア、シンガポール、スリランカ、タイを含むアジア全域の宗教に関する以前の調査では、シンガポールの宗教転向率（35%）のみが東アジア社会で見られる率に近い。

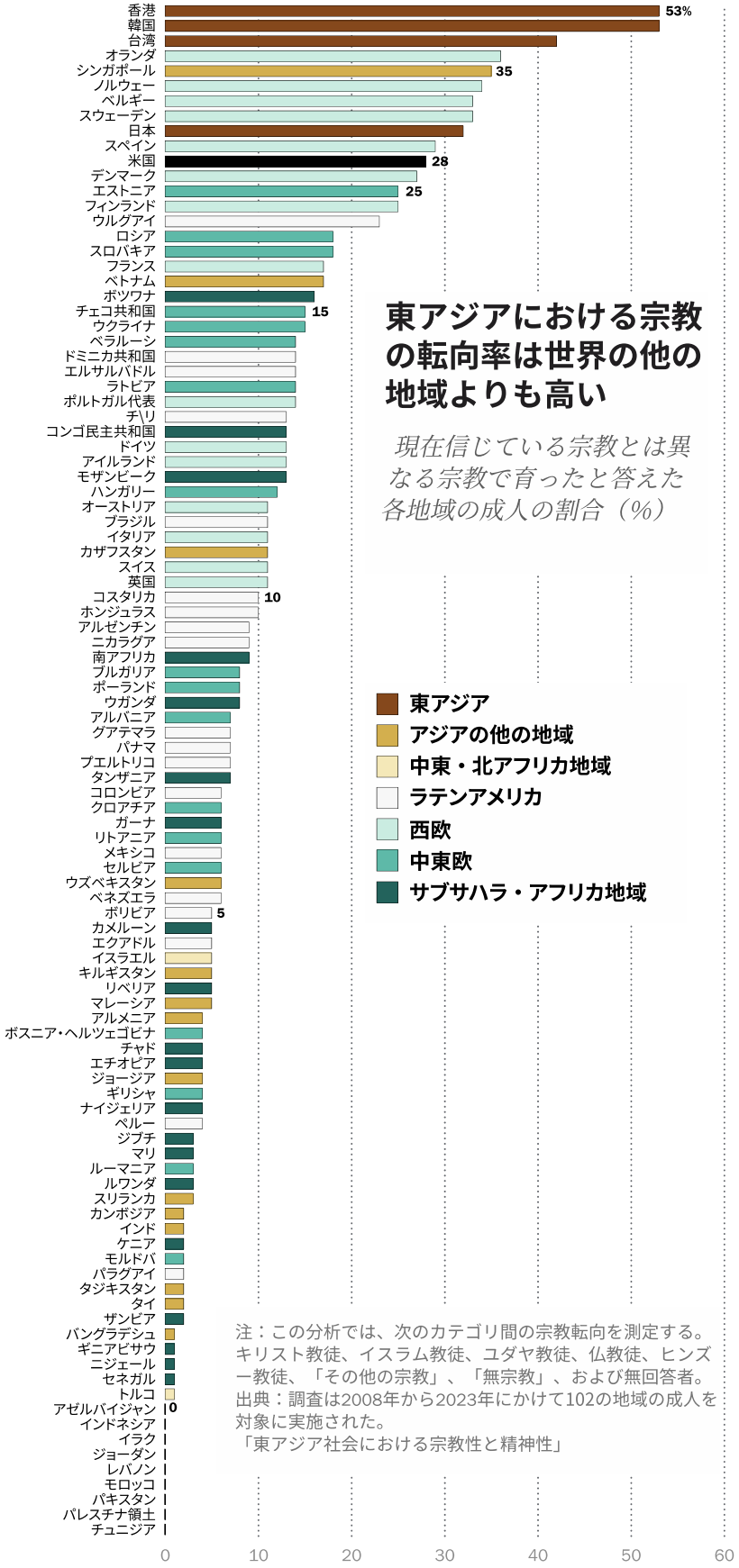
2017年に西ヨーロッパの15の地域を対象に行った調査でも、数十年にわたる宗教分離により無宗教人口が急増している地域であり、転向率が40%を超えた国は見当たらなかった (最高はオランダの36%であった)。

また、2023年夏に収集したデータによると、米国では成人の28%が自分たちが育った宗教的慣習をもはや意識していない。

ラテンアメリカや中東・北アフリカ地域など、世界の他の地域では、宗教転向ははるかに一般的ではない。[3]

[2]この分析では、アルメニア、アゼルバイジャン、ジョージアがアジアに含まれている。これらのコーカサス3か国は、黒海とカスピ海の間に位置し、ヨーロッパとアジアの国境地帯にある。

[3]この分析では、次のカテゴリ間の宗教転向を測定する。キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、仏教徒、ヒンズー教徒、「その他の宗教」、「無宗教」、および無回答者。より詳細なカテゴリー（カトリックとプロテスタント、プロテスタントの異なる宗派、仏教内のさまざまな学派など）を分析に使用した場合、宗教を変えたと考えられる人の割合は増加すると考えられる。（例として、米国における宗教転向に関する2015年の詳細な分析をお読みください。）世界中で一貫した比較を可能にするために、世界の主要な宗教慣習のレベルで転向を分析した。



PEW RESEARCH CENTER

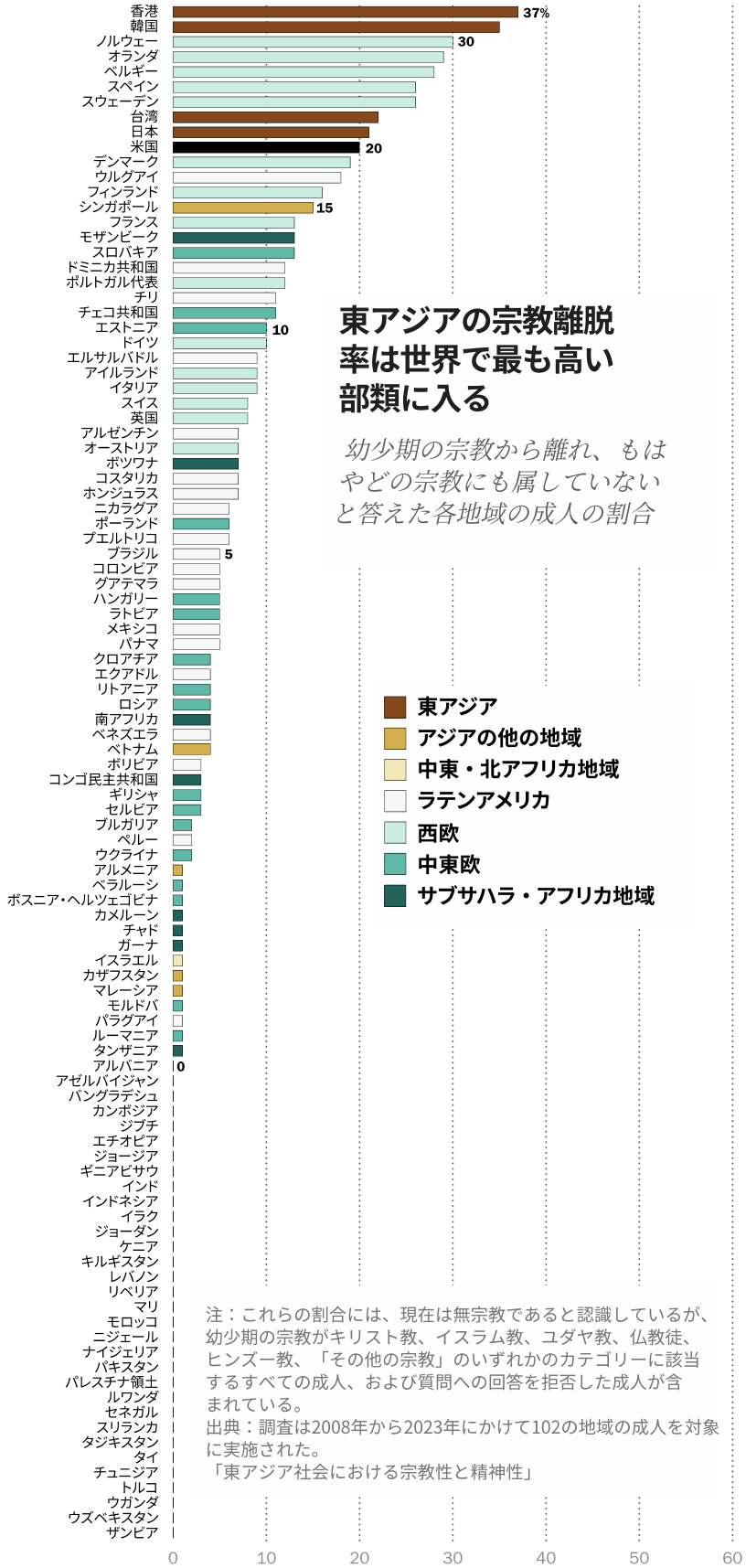
また、2008年以来世界中で収集したデータを分析し、東アジアとベトナムの離散率が他の地域とどのように比較されているかを確認した。

香港（37%）と韓国（35%）は、宗教の中で育ったものの、もはやその宗教に属していないという成人の割合が世界で最も高い。これにノルウェー（30%）、オランダ（29%）、ベルギー（28%）などの西ヨーロッパ諸国が続く。

また、他の 2 つの東アジア社会、台湾（22%）と日本（21%）もリストの上位に挙がっている。

長年にわたって調査したほとんどの地域、中央および東ヨーロッパ、中東・北アフリカ地域、およびサブサハラ・アフリカ地域の大半の調査対象地域を含む）では、成人のおよそ5%以下は、宗教を信じて育ったものの、現在は無宗教であると答えている。本報告書のために調査した5つの地域のうち、離脱率がこれほど低いのはベトナム（4%）だけである。

102の社会および地域で調査を実施した時期については、　付録Aをご覧ください。）


東アジアの宗教離脱率は世界で最も高い部類に入る
幼少期の宗教から離れ、もはやどの宗教にも属していないと答えた各地域の成人の割合
東アジア
アジアの他の地域
中東・北アフリカ地域
ラテンアメリカ
西欧
中東欧
サブサハラ・アフリカ地域
香港 37%
韓国
ノルウェー 30
オランダ
ベルギー
スペイン
スウェーデン
台湾
日本
米国 20
デンマーク
ウルグアイ
フィンランド
シンガポール 15
フランス
モザンビーク
スロバキア
ドミニカ共和国
ポルトガル代表
チリ
チェコ共和国
エストニア 10
ドイツ
エルサルバドル
アイルランド
イタリア
スイス
英国
アルゼンチン
オーストリア
ボツワナ
コスタリカ
ホンジュラス
ニカラグア
ポーランド
プエルトリコ
ブラジル 5
コロンビア
グアテマラ
ハンガリー
ラトビア
メキシコ
パナマ
クロアチア
エクアドル
リトアニア
ロシア
南アフリカ
ベネズエラ
ベトナム
ボリビア
コンゴ民主共和国
ギリシャ
セルビア
ブルガリア
ペルー
ウクライナ
アルメニア
ベラルーシ
ボスニア・ヘルツェゴビナ
カメルーン
チャド
ガーナ
イスラエル
カザフスタン
マレーシア
モルドバ
パラグアイ
ルーマニア
タンザニア
アルバニア 0
アゼルバイジャン
バングラデシュ
カンボジア
ジブチ
エチオピア
ジョージア
ギニアビサウ
インド
インドネシア
イラク
ジョーダン
ケニア
キルギスタン
レバノン
リベリア
マリ
モロッコ
ニジェール
ナイジェリア
パキスタン
パレスチナ領土
ルワンダ
セネガル
スリランカ
タジキスタン
タイ
チュニジア
トルコ
ウガンダ
ウズベキスタン
ザンビア
0
10
20
30
40
50
60
注：これらの割合には、現在は無宗教であると認識しているが、幼少期の宗教がキリスト教、イスラム教、ユダヤ教、仏教徒、ヒンズー教、「その他の宗教」のいずれかのカテゴリーに該当するすべての成人、および質問への回答を拒否した成人が含まれている。
出典：調査は2008年から2023年にかけて102の地域の成人を対象に実施された。
「東アジア社会における宗教性と精神性」

一般的な信念と実践

Pew Research Centerの宗教調査では、「あなたの人生において宗教はどのくらい重要ですか?」とよく尋ねられます。私たちはこの質問を、地域や時代を超えて人々の生活の中で宗教が果たしている役割を測定するための多くの方法の 1 つとして使用します。

東アジアの一部の地域では宗教への帰属率が比較的低いこと、また「宗教」 という言葉をアジアの数か国語言に翻訳することの複雑さを考慮すると、この地域で宗教が自分にとって「非常に重要である」と答えた人が比較的少ないことは、おそらく驚くべきことではないであろう。

調査を実施した5つの地域では、宗教が人生において非常に重要であると答えた成人は26%にすぎず、そのうち日本ではわずか6%であった。[4] 一部の近隣のアジア諸国を含む世界の他の地域では、調査によりさらに高い数値が判明することがよくある。[5]

ただし、人生において宗教がそれほど重要であるとは考えていない多くの人が、さまざまな宗教的実践に従事し、さまざまな霊的信念を抱いている。

この地域の人々は、宗教が生活の中で非常に重要であると言うよりも、精神的な世界に関わる傾向が高い

次のように回答した各地域の成人の割合（%）

	カルマが存在すると考える	夢またはその他の形で先祖の霊が訪れたことがある	瞑想を実践したことがある	毎日祈っている	宗教は生活の中で非常に重要であると考える
香港	76%	16%	22%	13%	11%
日本	16	36	30	19	6
韓国	48	40	59	21	16
台湾	87	36	34	16	11
ベトナム	75	42	16	20	26

注：暗い色合いは、より高い値を表す。回答者には、先祖の霊が夢の中でやって来たり、あるいは他の形で一緒にいると感じたことがあるかどうかを個別に尋ねた。
出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。
「東アジア社会における宗教性と精神性」

PEW RESEARCH CENTER

[4] Pew Research Center、中国政府による外国研究機関への規制により、中国での調査を実施できなかった。ただし、2018年に中国で行われた世界価値観調査では、中国人成人の13%が宗教が人生において非常に重要であると答えていることが判明した。詳細については、2023年の報告書「中国における宗教の測定」をお読みください。

[5] たとえばインドでは、2019年から2020年の調査によると、成人の84%が宗教が人生において非常に重要であると答えている。また、2022年に調査が実施された南アジアと東南アジアの6か国でも、シンガポールを除くすべての地域で成人の過半数がそのように答えている。シンガポールでも、成人の36%が宗教を人生において非常に重要なものと考えている。中欧、東欧、西欧でで実施された2015年から2017年の調査によると、宗教に関するセンターの研究で、この質問に対する態度が東アジアとやや似ていることが判明したのはヨーロッパだけであり、ヨーロッパ34か国の成人の中央値20%が、宗教は人生において非常に重要であると答えている。

例えば台湾では、宗教が自分にとって非常に重要であると答えた成人はわずか11%だが、87%がカルマを信じており、36%が先祖の霊が訪れたことがあると答え、34%が瞑想を行ったことがあると答えている。

東アジアや近隣のベトナムでは、先祖の霊が長い間儀式の焦点となっており、先祖崇拝は今でも広く行われている。調査を実施したすべての地域の成人のおよそ半数以上が、先祖にお供えなどをして供養したと答えている。この習慣は仏教徒や特定の宗教を信仰していない人々の間でよく見られる。

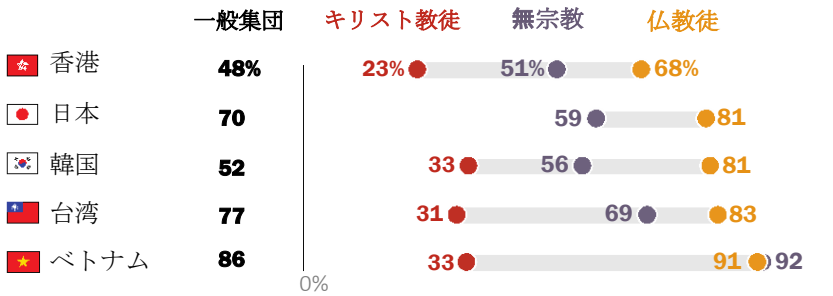
特に印象的な例を 1 つ挙げる。宗教に属さないのベトナム人成人の92%は、過去1年間に先祖に供物をしたことがあると答えている。

亡くなった親族とのこうしたつながりは、必ずしも一方通行とみなされているわけではない。香港を除くすべての地域で、成人の約10人に4人が、夢などの形で先祖の霊が訪れたことがあると回答している。

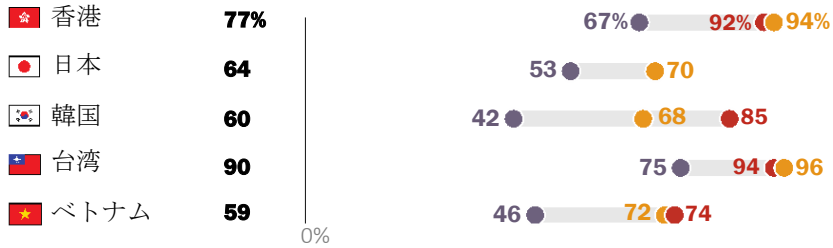
5つのすべての地域で調査を受けた成人のほとんどは、神や神や精霊などの目に見えない存在を信じていると回答した。宗教に無所属の成人が神や目に見えない存在を信じる割合はキリスト教徒や仏教徒に比べて低いも

調査対象となった地域の宗教に無所属の成人の少なくとも半数が、先祖を供養するために最近お供え物をしたと報告している。

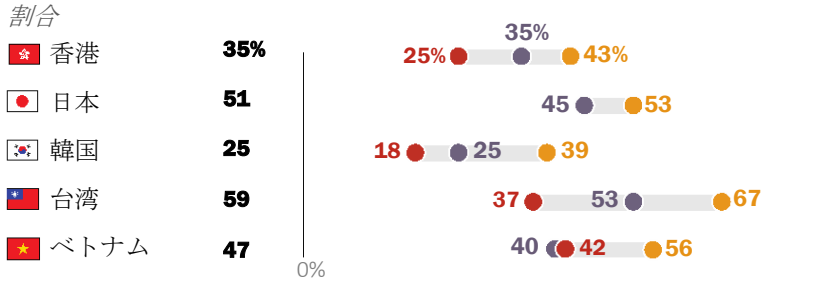
過去12か月間に先祖にお供え物をしたりして供養したと答えた各地域の成人の割合（%）



神や目に見えない存在を信じていると答えた各地域の成人の割合



山、川、木々には独自の霊が宿っていると思うと答えた各地域の成人の割合



注：回答者は、神を信じているか、あるいは世界には神や精霊などの目に見えない存在が存在すると思うか、と別々に尋ねられた。「神」は、特定の宗教の神や女神を指すことなく、可能な限り一般的な用語を使用して各言語に翻訳された。日本のキリスト教徒のサンプルサイズは分析するには小さすぎる。

出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。「東アジア社会における宗教性と精神性」

PEW RESEARCH CENTER

のの、いずれの地域でも少なくとも10人に4人の無所属の成人がこれらの信念を表明している。台湾では、宗教に無所属の人の4分の3が、神や目に見えない存在を信じていると答えている。

成人のかなりの割合が、自然を目に見えない霊の領域だと考えている。台湾、日本、ベトナムでは、成人の約半数以上が、山、川、木々には独自の魂が宿っていると信じていると回答している。

東アジアの元仏教徒と生涯仏教徒を比較する方法

これまで見てきたように、東アジアでは多くの宗教的離脱が見られる。香港の成人の37%、韓国の35%、台湾の22%、日本の21%が、幼少期に仏教、キリスト教、道教などの宗教の中で育ったが、現在はどの宗教にも属していないと答えている。（比較すると、ベトナムの成人で無宗教になっている人はわずか4%である。）

同時に、自分は無宗教であると言う人の多くは、それでも何らかの宗教的信念を表明し、伝統的なスピリチュアルな行動を行っていると答えている。

これにより、次のような疑問が生じる。アジアにおいて宗教への所属はどれほど重要であるか。宗教的なレッテルは本当に重要であるのか。

簡単に言うと、その答えは「はい」である。人々が自分自身を説明する方法には、確かに意味がある。東アジア人の 3 つのカテゴリーを例に上げる。

- 生涯仏教徒 (仏教徒として育てられ、今でも仏教徒であると考えている人々)
- 元仏教徒で現在は無所属（仏教徒として育てられたが、もはやどの宗教にも属さないと答えた人）
- 生涯無所属（自分は何の宗教にも属さずに育ったが、今でも何の宗教にも属さないと答えた人）

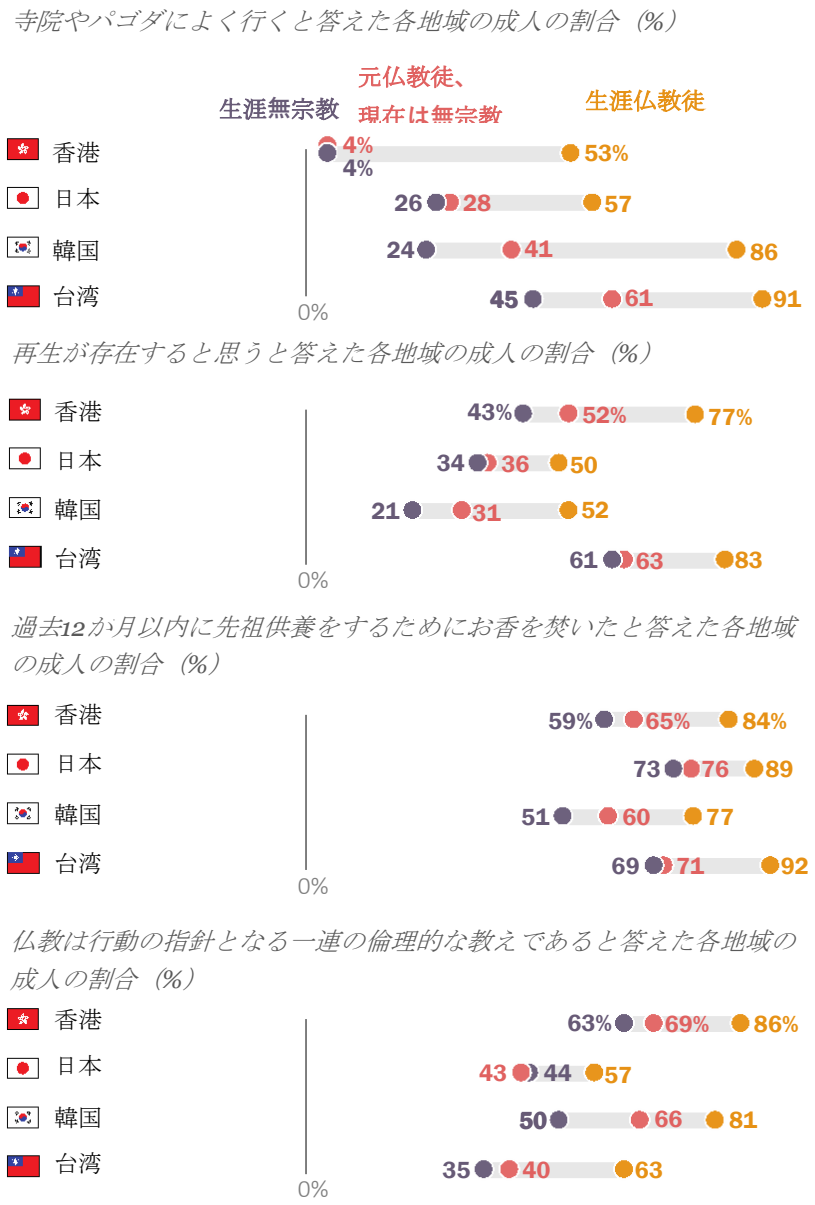
アンケート調査を実施した東アジアの4つの対象地域である香港、日本、韓国、台湾には、3つのカテゴリーすべてに当てはまる人々が十分におり、各グループの詳細な分析が可能である。これらすべての地域で、生涯仏教徒は、元仏教徒よりもかなり高い割合で宗教的実践に参加し、宗教的信念を保持していると一貫して報告している。ただし、元仏教徒には、幼少期に仏教徒だった影響が何らかの形で残っている可能性もあり、これらの人々は平均して、生涯無宗教だった人よりも幾分信仰心が強い。

たとえば、台湾の生涯仏教徒は、元仏教徒よりも寺院や仏塔に行くと回答する可能性が30ポイント高い (91% 対 61%)。一方、元仏教徒は、生涯無宗教だった台湾人よりも寺院や仏塔を訪れる可能性が16ポイント高い (61%対45%)。

先祖を崇拝することに関するアンケートの質問にも同様のパターンが見られる。3つのカテゴリーすべてのほとんどの人が、過去12か月以内に先祖供養をするためにお香を焚いたと述べていますが、この活動は生涯仏教徒の間で最も一般的である。香港では、生涯仏教徒の84%が過去1年間に先祖のためにお香を焚いたことがあり、元仏教徒の65%と生涯無所属の仏教徒の59%がお香を焚いたことがあると回答した。

さらに、これらの回答者の仏教徒の概念において、仏教徒は一般に、生涯の仏教徒よりも生涯無所属の仏教徒に近い。日本の生涯仏教徒の大多数（57%）は、仏教を「行動を導くための一連の倫理的教え」と見なして

東アジアでは、仏教徒から無宗教に転向した人や生涯無宗教の成人のほとんどが最近お香を焚いている



出典：2023年6月2日～9月17日にアジアの5つの地域の成人を対象に実施されたアンケート調査。詳細については、「方法論」をお読みください。
「東アジア社会における宗教性と精神性」
PEW RESEARCH CENTER

いるが、元仏教徒（43%）や生涯無宗教者（44%）はこれよりも少ない割合である。

つまり、人々が現在の宗教への所属と幼少期の所属をどのように説明するかは、その人の宗教的信念と実践のレベルに一致する傾向がある。

本報告書のその他の重要な調査結果

- 調査対象となった東アジアの 4 つの社会の成人の少なくとも5分の1と、隣接するベトナムの成人の79% が、人生のある時点で祖先の霊が自分を助けてくれたと感じていると報告している。（第5章には祖先との交流についての詳細が記載されている。）
- この社会全体で調査に参加したほとんどの人々は、現在の宗教的アイデンティティとまったく同じではないとしても、少なくとも 1 つの宗教的信念または哲学の「生き方」に個人的なつながりを感じていると述べている。例えば、韓国のキリスト教徒の34%は仏教の生き方に個人的なつながりを感じていると回答し、韓国の仏教徒の26%はキリスト教の生き方につながりを感じていると回答している。(第2章では、生き方としての宗教と、複数の伝統に対する人々の親近性について説明する。)
- すべての宗教団体の大多数の成人が、仏教は「行動を導く一連の倫理的教え」、「自分が属する文化」であり、「自分が従うことを選択する宗教」であると答えている。（第2章では、調査回答者が仏教をどのように定義しているか、また仏教徒が「真の」仏教徒であるために重要であると考えるいくつかの信念と実践について詳しく説明している。）
- この社会の人々、特にキリスト教徒は一般に、宗教を社会に前向きな力としてみなしている。(第6章では、宗教と社会の交差点について詳しく説明する。)

本調査結果の概要は、原文の英語版から翻訳されたものである。